

大塚薬報

Otsuka-people creating new products for better health worldwide

ISSN 0030-669X

昭和25年2月創刊
令和2年5月10日発行

OTSUKAYAKUHO
2020 / NO.755

5



〒417-0801 静岡県富士市大淵字大峯 3898 番 1
<https://www.shin Fuji.or.jp>

- 院長：木島金夫
- 設立：1988年
- 病床数：206床
- 診療科：内科（一般、脳神経、消化器、腎臓）、循環器科、外科、整形外科、血管外科、皮膚科、リハビリテーション科、歯科



医療、療養、看護の三本柱を主眼に地域に根差す

急性期から慢性期までをカバー

静岡県富士市にある医療法人社団 喜生会 新富士病院（木島金夫院長・206床＝障害者一般52床、療養154床）は、まさしくその名の如く富士山の麓にある病院で、昭和63年（1988）に開設された。医療、療養、看護を三本柱に、基本的に高齢者の医療と福祉に貢献できるような、地域に根差した病院づくりを目指している。同院パンフレットには「「まともな医療 Honest Medical Healthcare」を提供することが当院の最大の目標です。」という川上正人理事長の言葉が載せられている。

同院は現在、内科（一般、脳神経、消化器、腎臓）、循環器科、外科、整形外科、血管外科、皮膚科、リハビリテーション科、歯科、通所リハビリテーション（定員25人）、および外来、入院の両方に対応する透析センターを有し、診察、診療を行う一方、一般健康診断、各種予防接種なども常時受け入れている。物忘れ外来も同院の特徴の一つだ。

リハビリテーションは、理学療法、作業療法を柱に行われているが、ここでは患者の長期療養、在宅復帰、在宅生活の維持を支援することを目的に、患

者およびその家族の希望、健康状態、将来の生活場所、日常生活動作、心身の機能などを考え合わせ、個別の実施計画を立案し実施している。

さらに同院では、重度の肢体不自由者、脊椎損傷などの重度障がい者、脳卒中など寝たきりの重度の意識障がい者、パーキンソン病や筋萎縮性側索硬化症などの神経難病患者の治療、看護、リハビリを行う専門病棟を設けている。

また、急性期が過ぎ、慢性期に入った患者が療養をしながら医療、看護、介護を受けることのできる療養病床を持っていて、ここでは療養計画に基づいたより良いケアの提供に努めるが、患者からは必要な治療が継続して受けられ安心だと好評だ。

同院の建物は、「コ」の字型に積みあがった3階建てで、北側1階の玄関を入るとすぐに待合ロビーがあり、その正面に薬局、受付、事務室が並び、左に進むとそれぞれ3つの診察室と処置室がある。右側通路のサイドにCT室、X線室、エコー室などがあり、その突き当たりに3つの治療台を備える歯科診察室がある。一般の外来患者も受け入れているが、この歯科診察室の存在が高齢者医療を進めるうえで大きな意味があることは、容易に想像できる。その手前を右に折れると第一透析室（13床）がある。

常温・冷蔵で使用できる細胞保存液 ～細胞の輸送など短時間の保存に!～

研究用試薬

細胞懸濁保存液
セルストア® S

細胞洗浄保存液
セルストア® W



本製品は研究用試薬であり、ヒトまたは動物の医療を目的として使用できません。
 本製品の取扱いについては、使用説明書をご参照ください。

製造元
 Otsuka 株式会社大塚製薬工場
 徳島県鳴門市撫養町立岩字芥原115

販売元/問合わせ先
富士フィルム 和光純薬株式会社
 本社 〒540-8605 大阪市中央区道修町三丁目1番2号 TEL 06-6203-3741 (代表)
 東京本店 〒103-0023 東京都中央区日本橋本町二丁目4番1号 TEL 03-3270-8571 (代表)
 ●九州営業所 ●中国営業所
 ●東海営業所 ●横浜営業所
 ●筑波営業所 ●東北営業所
 ●北海道営業所
 フリーダイヤル 0120-052-099
 試薬URL: <https://labchem-wako.fujifilm.com>

詳しい製品情報

セルストアS

検索



2020年2月作成

そして南側1階はリハビリテーションのゾーンとなる。リハビリテーションルームは環境としては申し分のない、窓から日の光がたっぷりと注ぎ込む広々とした開放感に満ちた空間だ。こちら側（南棟）にも専用の玄関があるので、通所リハビリテーションに来る人たちが北側玄関を出入りすることはない。たまたまスタッフたちがリハビリを終えた患者を見送る場面に遭遇したが、双方の笑顔と笑顔の交錯するシーンはなかなか印象的だった。

2、3階はそれぞれにナースステーションが2カ所ある病棟で、2階には病室（28室）、食堂兼談話室（2カ所）、機械浴室がある。3階もほぼ同様のレイアウトで、病室（27室）、食堂兼談話室（1カ所）と南側病棟に第2透析室（10床）がある。病室も一人当たりのスペースが広がっていて、入院環境はよさそうだ。

現在、同院の外来患者は1日平均32人、入院患者が障害者一般50人（病床稼働率98%）、療養150人（同98%）となっている。

昨年からは救急車受け入れも

一方、関連事業所である新富士病院健康管理センター、介護老人保健施設「ヒューマンライフ富士」（195床）、同「新富士ケアセンター」（104床）、また、在宅介護支援センター・居宅介護支援・訪問介護を包括する「安心みまもりセンター」、富士市認可事業所内保育所「ぶちっこ園」が、同院を含む敷地内に隣接している。

敷地前の道路から見上げる新富士病院と関連事業所（ヒューマンライフ富士、新富士ケアセンター）の建物群の様子は、すべて合わせて“新富士地域高齢者総合医療福祉センター”といった趣だ。さらに、車で約15分の富士市厚原に、看護小規模多機能型居宅介護「喜あつはら」、訪問看護ステーション「喜」がある。

また同院の開設以来、30年以上にわたって同院が中心となり、静岡県東部、神奈川県川崎市、東京都大田区および町田市などに9つの病院の



駿河湾を見下ろす富士の裾野に立つ 救急受け入れから看取りまで、地域の人たちに頼られる病院を目指す。



健康管理センター入口



リハビリテーション室



通所リハビリテーション室



通所リハビリに来た人たちを送り出す様子

ほかにクリニック、介護福祉施設などの設立、グループ参加を推進し、「新富士病院グループネットワーク」を構築してきた。

同グループが掲げるビジョンは、「地域密着型の医療福祉健康支援グループを目指す」、「地域での生活の継続を支える」、「医療と福祉で人々の安心を築く」というものだが、こうしたグループにおける医療、福祉（介護）施設のそれぞれの地域での“頑張り”によって、“自前グループ”のネットワークのみならず、結果的に、地域高齢者医療ネットワークの構築、連携強化につながり、多くの協力機関の信頼を得るまでになっている。その中心的な存在が新富士病院というわけだ。

しかし、これまで療養型病院としての色合いが強かった同院だが、「医療環境が必ずしも良くない当該地域の中であって、地域の高齢者医療を支え中心的役割を果たしていく上で、どう

しても救急対応を図る必要があった」（木島院長）ことから、新たに高性能CT導入による検査精度を向上させる一方、内視鏡部門における上部内視鏡に加え大腸内視鏡検査を可能にした。さらに手術室造設により血管外科領域では下肢静脈瘤のレーザー手術、壊死組織の切断・除去および植皮、一般外科領域では表在腫瘍摘



外来透析室（第1透析室）13床ある。病棟にも第2透析室がある。



退院する患者や通所リハビリテーションの利用者を見送るたくさんの笑顔に同院の優しさが表れる。



救急車の到着



外来待合室



外来診察室



手術室



歯科 4人の歯科医師がおり、入院・外来、関連施設の患者の歯科治療、口腔ケアを担っている。



薬局 院内処方



病棟

出、肛門疾患手術、外傷処置などの治療ができるようになった。

さらに今後は、外科外来、整形外科外来、フットケア外来などを充実させることによって外科系医療にもウイングを広げ、高齢者医療をさらに充実していくということだ。ちなみに同院には4人の外科医がいる。

昨年5月からは救急車による搬送患者の受け入れ（一次救急）にも対応しており、これまでの約1年で100件を超える救急患者を受け入れている。同院のある富士市および隣の富士宮市（両市合わせて人口38万人強）には救急受け入れ施設が不足していたことから、「結果的に今後、地域の基幹的役割を担わざるを得ない」（木島院長）ということだが、これによって地域住民が受ける“恩恵”は多大だろう。実際に地域における救急車受け入れ状況は約65%である。

地域包括ケアシステムの実現を図るためにも、その枠組みの中で機能する医療機関、介護施設、自治体などが足並みを揃えるだけではなく、それぞれがそのための努力を惜しまないことが必要だろう。

「まずは地域での信頼と評判を獲得することが重要だが、救急対応によって確実にその点での評価が高まっていることを実感している。医療圏における医師会や基幹病院からの評価も上がり、実際に紹介も増えてきている」と木島院長。

同院も充実した救急機能が備わってきていることで、確実にここ2、3年で次のステージに踏み込んできているといえそうだが、今後の具体的な目標として、全病床数の半分を障害者一般病床にしていき、できるだけ「断らない医療」を実現していく考えだ。そうすることで同院の地域での立ち位置もより鮮明になってくるということだろう。すでに日々の診察、診療に加えて急性期対応ができる同院は、地域でのプライマリ・ケアを担う診療所や地域住民の拠り所として大きな存在になっている。

一方で、高齢者の受け入れや在宅での看取りにおいて、これまでの経験を活かすとともに、聞き取り調査などで具体的な内容を把握して、この地域で真に求められる医療サービスの提供と充実を目指している。

今の仕事を徹底して見直す

それでも病院が、地域医療の観点からの在り様と、病院そのものの経営の観点からの在り様を俯瞰しながら現在を歩み、未来を切り開いていこうとする時、いずれにおいても常に課題は付き物だ。地域医療機関との関わり方、地域住民への啓発と理解を得るための様々な施策、設備投資、そして人材確保とスタッフ教育…等々において。

しかし、これらを打開してこそ健全な医療の実現が図れる。これまでも同院ではこうした点で努力を続けた結果、地域の中で一定のポジションを得、特に高齢者に頼りにされる、地域になくはならない病院として成長してきた。このことは、働く病院スタッフの自信にもつながってきている。それでも当該地域の医療事情と社会の変化を考えると、さらにブラッシュアップが求められるようになってきた。それだけ期待値も上がってきているということでもある。

これに対し、「今の仕事を徹底して見直すことが必要だと考えている」と木島院長は語り、「特に仕事の簡素化ができるのであれば直ちに取り組んでいきたい。それによって時間の省けるところは省き、今いる職員の総力で新しいサービスを生み出すことができるはず」と続ける。

それを実現していくことは取りも直さず、間口の広い医療を構築していくことにもなるが、しかし、そのことによって同院そのものの機能の高度化とグループ全体の緊密なネットワークの構築が図れば、これからますます進む高齢社会における一つの医療モデルにもなり得るだろう。